

●マイハート		
◇新たな思いで……	大山加奈……	3
●連載／教育のひろば		
◇PISA2009の結果をどう読むか	上杉賢士……	4
●連載／教育一語		
◇「人は 人によりてのみ人となり得る」「人間一人を粗末にするととき 教育はその光を失う」	新宮弘識……	8
●実践報告／『ゆたかな心』の新資料を使って		
◇1年「ハムスターの あかちゃん」	佐々井信子……	10
◇4年「ノーベル賞の生みの親～アルフレッド・ノーベル～」	古波藏尚子……	14
◇5年「世界一の技術」	北川 忠……	18
●連載		
◇川柳を道徳に活かす③	松田憲子……	22
●連載		
◇人間関係づくりの演習を活かす③	土田雄一……	23
●連載／夢追探訪		
◇文学的・国語的・道徳的な読み	……	24
●連載／道徳まんが道		
◇「自由に言っているんだよ」「じこ責任」	加藤宣行……	26

本文イラスト／どいまき

本文中の勤務校は平成23年1月1日現在のものです。

●著者プロフィール●

佐々井信子先生▶初夏になると、学校の近くを流れる川沿いでホテルが光り、山のふもとをイノシシが歩きます。そんな自然豊かな地域で育った子どもたちは、穏やかで優しい心の持ち主です。環境は人の心を作るといいますが、どんな社会でも豊かな心を大切に作る人づくりをしていきたいなあと思っています。

古波藏尚子先生▶平成20年の3月まで、琉球大学教育学部附属小学校に勤務。同4月から、浦添市立港川小学校に勤務し、平成20・21年度の2年間、文部科学省指定・浦添市教育委員会指定、道徳教育研究校の研究主任。平成22年度も校内研究主任及び指導方法工夫改善担当として6年生の算数を担当し、道徳の指導主事補及び教科指導員を兼務しております。

北川忠先生▶北陸は雪国というイメージなのですが、近年はひかえ目な降雪が続く、雪と戦う心意気も忘れ気味になっていました。しかし今期の大雪には北陸人もびっくり。我が郷土の特色を思い出させてくれました。今はその雪も解けて、雪をまとった白山連峰が春の近さを教えてくれます。

土田雄一先生▶昨年、5年生で自作資料を使った飛び込みの道徳授業をしました。楽しかった！全員が発表し、ねらいにもせまることができました。それができたのはなぜか。やはり、担任の学級経営のすばらしさに尽きます。子どもたちと授業をするのは楽しいですね。

松田憲子先生▶今年は初日の出を成田山で迎えました。成田山の境内から、大きくゆらゆらとのぼる朝日にひたすら圧倒されながらも、心がふわっとあたたかくなりました。感動することは、心の大事な糧だと思います。

加藤宣行先生▶
筑波大学付属小学校教諭・淑徳大学講師
日本道徳基礎教育学会事務局長
使えるベーシック研究会常任理事
光文書院『ゆたかな心』編集委員

■小社HP（「ご意見・おたより」コーナー）などを通して『子どもの道徳』へのご意見・ご感想をお寄せください。



新たな思いで……

元バレーボール全日本代表
(日本バレーボールリーグ機構職員)

大山 加奈



バレーボールとの出会い

小学1年生のときにクラブの先輩から勧誘を受けましたが、喘息で体が弱かったこともあり両親から反対されて、その時はあきらめました。でも、2年生になってからも「やっぱりバレーをやりたい!」と強く思い、自分から言って両親に認めてもらいました。週4回練習がありましたが、遊びもバレーをやるくらい熱中していました。

オリンピック出場

オリンピックに出ることは小さいころからの夢でしたし、両親の夢でもあったので、本当に喜んでくれました。「やっと親孝行できたかな」という気持ちでした。オリンピック前に、出場するという夢をあきらめかけていた時期もあったので、コートに立てたときはすごくうれしかったです。

Vリーグを盛り上げる!

今は、平日はVリーグの事務局でデスクワークをして、土日は各地で試合の運営にあたっています。試合が行われる現地に入って、地元メディアに出演しPRもしています。

試合を運営する側になって改めて感じたのですが、本当に多くの人に支えられていたんだなと思います。試合をするために、ボランティアの人も含めてこんなにたくさんの人が関わっているのかと実感しています。

Vリーグは、コートと観客の距離がすごく近いです。コートと同じ目線で見ることができ、選手の生の声も耳に届きます。プレー中の指示の声、控え選手の応援の声など、選手たちがどういったことを言っているのかが分かるので、バレーをやっている人たちには勉強になると思います。

あとは控え選手たちがアップしている姿も見たいですね。みんな一生懸命準備をしています。これはあまりテレビに映らない部分です。いい控えの選手がいるチームはやっぱり強いです。

バレーボールの特長

バレーは一人ではできない“思いやり”のスポーツです。レシーブを受けてトスを上げる選手がいる。打つ時はみんながつないでくれたボールを

打つことになります。すべての動作が、次にプレーする人のことを考えて行わなければいけません。試合の終盤で苦しくても跳べるのは、そうやって支えてくれている仲間がいるからです。みんながつないでくれたボールだからこそ責任を感じ、苦しいときでも跳べるんだと思います。

レシーブは苦手?

レシーブは、本当はすごく好きなんです。全日本に呼ばれて、高校時代とは全く違うスピードに戸惑った時期はありました。そのころ周りからいろいろと言われ、迷ってしまったんだと思います。その後、練習してレシーブが上手くなったというよりも元に戻ったという感覚でした。そのとき救ってくれたのは高校時代の恩師でしたね。「加奈はレシーブが下手じゃない」って言ってくれて。恩師には今でも助けてもらっています。

今の夢

指導者になるよりも、今は競技の底辺を広げる活動をしていきたいと思っています。それと、自分もそうだったので体の弱い子や幼児～低学年の子どもたちに、バレーだけでなくスポーツのよさ、体を動かすことの楽しさを感じてもらえるような活動もしていきたいと思っています。

それと怪我を未然に防ぐこと。筋力が付いてないうちから無理をしてしまうのはダメです。そういったことも、もっと勉強して伝えていきたいです。

子どもたちへ

まず、やりたいことを見つける。それから、それぞれの個性を活かして長所を伸ばす。あとは、好きになって目標を持つことが大切だと思います。

バレーの指導をしていると、その子が一瞬で変わるときがあります。その変わる姿を見られるのは、うれしいです。(談) (取材日: 2011年2月15日)

1996年ひまわりクラブにて全国制覇/1999年中学校選手権大会で全国制覇【成徳学園中】/2002年春高・インターハイ・国体と三冠を達成し、全日本に初選出【成徳学園高(現下北沢成徳高)】/2003年東レ株式会社、東レアローズ入団。ワールドカップに出場/2010年6月腰痛の再発により引退を決意/同年8月東レ株式会社より日本バレーボールリーグ機構に出向

PISA2009の結果をどう読むか

千葉大学大学院教授 上杉 賢士

◆結果の概略

昨年12月7日、OECD（経済開発協力機構）が2000年から3年間隔で実施している国際学習到達度調査（Programme for International Student Assessment 以下、「PISA調査」とする）の第4回目の結果が発表された。

それによると、第1回目に参加して以来続いていたわが国のランキングの低下傾向に一定のはじめがなかった。特に第1回目の8位から第3回目には15位まで低下した「読解力」が、今回の調査では8位まで回復した。この結果を受けて、文部科学省は早速「これまでの教育政策が効果を発揮した」とコメントした。

今回の調査では、それ以外にも注目すべき結果が見られた。

初参加の上海が、すべての領域において世界トップに躍り出た。OECDはPISA調査への参加を原則として国単位にしているが、特例的に市単位の参加を認めている。上海はその特例を利用した参加であった。

また、上位には上海以外に韓国、シンガポール、香港、台湾などのアジア諸国がランクされた。ヨーロッパではわずかにフィンランドが顔を出しているだけであり、とりわけ東アジア諸国の学力水準の高さが顕著に示された。

◆メディアはどのように伝えたか

発表の翌日には、新聞各紙がこの結果を報道した。また、発表3日後の10日には、各国の研究者を招いたシンポジウムが東京で開催され、多くの教育関係者が集まった。

ある新聞は、「来年度以降、教える内容を増やす新学習指導要領が全面実施される。学校現場は気を緩めず、学力の向上を図ってもらいたい」と

した。このコメントは各紙にほぼ共通する論調で、ランキングの回復に一定の評価を示しながらなお傲を飛ばすという姿勢であった。また、ある新聞は「アジアの優秀な学生を日本の本社で採用する企業も現れ始めた。日本の若者が各国のライバルと就業を競う時代になっている」と指摘し、特に東アジアの国々との国際競争力において日本は遅れをとっていると厳しく論評した。

シンポジウムでは、さすがに冷静な分析が行われたが、一部の聴衆から「上海は本当にフェアに実施したのか」とか、「日本ではどの学校がこの調査に参加したのか」となどといういささか感情的な質問が出された。アジアの諸国に遅れをとった無念さのような気持ちがあるのだろう。

念のために補足すると、PISA調査は、義務教育を修了した15歳（日本は高校1年生）が参加し、参加校はサンプルに偏りが出ないように無作為抽出で行われる。日本では各都道府県別に抽出された約6000人が参加した。かつて抽出方法に不正があったために集計からはずされた国もあり、調査の方法や公正さに疑いをもつ態度は大人げないというべきであろう。

ちなみに、PISA調査の結果が統落傾向にあることを受けて、わが国でも「全国学力学習状況調査（以下、「学力テスト」とする）」が43年ぶりに復活した。この学力テストは、伝統的な学力を測定する「A問題」と、PISA型学力を想定した「B問題」で構成される。2007年の第1回目は悉皆（すべての小学6年生と中学3年生が受験した）で行われ、政権交代後は3割の抽出で行われた。それでも、自主参加を加えると総計で7割が受験したといわれている。

初歩的なことだが、サンプル調査と悉皆調査はその目的や扱い方にも自ずと違いがあることも承知しておくべきである。

表1 PISA2009 領域別上位国

	総合読解力		数学的リテラシー		科学的リテラシー	
1	上海	556	上海	600	上海	575
2	韓国	539	シンガポール	562	フィンランド	554
3	フィンランド	536	香港	555	香港	549
4	香港	533	韓国	546	シンガポール	542
5	シンガポール	526	台湾	543	日本	539
6	カナダ	524	フィンランド	541	韓国	538
7	ニュージーランド	521	リヒテンシュタイン	536	ニュージーランド	532
8	日本	520	スイス	534	カナダ	529
9	オーストラリア	515	日本	529	エストニア	528
10	オランダ	508	カナダ	527	オーストラリア	527
11	ベルギー	506	オランダ	526	オランダ	522
12	ノルウェー	503	マカオ	525	台湾	520
13	エストニア	501	ニュージーランド	519	ドイツ	520
14	スイス	501	ベルギー	515	リヒテンシュタイン	520
15	ポーランド	500	オーストラリア	514	スイス	517
	O E C D 平均	493		496		501

◆学力調査は体温計のようなもの

P I S A 2009の結果をどのようにとらえるか。この問いへの回答はそれぞれの立場によって異なるため、いささか難問に属する。

国は「これまでの教育政策の成果」だと胸を張りたいだろうし、メディアは東アジアの諸国に遅れをとっていると警告する。それでは、子どもたちの教育に直接的に携わる現場ではどのように受け止めればよいだろうか。

私は、この問いに対する最も適切な比喩は「体温計のようなもの」だと思っている。

体温計は、基本的に熱があったり体がだるかったりするときに使う。すなわち、普通は体の変調を感じたときに初めて体温計の存在を思い出し、脇や舌の下に差し込んで検温する。そして、その結果に応じて「安静にする」「薬を服用する」「医師の診断を受ける」などの処方を決める。

しかし、少なくとも体温計を常時携帯し、体温を一定の範囲に収めることを目的にして行動することはない。スポーツジムなどで脈拍数や心拍数を測定しながらトレーニングをすることはあっても、それは大人が限られた時間内で行うトレーニングだからこその例外である。

むしろ、だれでも子どもたちには高い学力をつけさせたいと願う。しかし、その学力の内実については、必ずしもコンセンサスが得られていない。P I S A 調査が意図する学力とは、「これからの時代を生きるために必要な学力」である。これに対して、わが国では伝統的に「読み・書き・計算」の力を学力ととらえる傾向にあった。

また、学力を支える条件としての学習意欲もまた重要だという指摘もある。P I S A 調査では、テストスコア以外に「勉強を楽しいと思うか」、「勉強していることが将来の役に立つと思うか」などについても調査し、その結果を公表している。それによると、わが国の子どもたちはテストスコアの高さとは逆に、勉強の楽しさや将来への有効性について極めて低い数値を示している。つまり、半ば義務感のようなものに後押しされて勉強に向かっているにすぎないのだ。

こうした状況において、私たちが今すべきことは、現在の学習環境を少しでも改善するためにさまざまなことにチャレンジすることである。

そして、そうした努力を一定の期間続けた後に、その効果を測定するために調査（検温）を行い、また結果に応じた対応策を練り直す。本来、学力調査とはそういうものだ。

◆PISAが測定しようとしている学力

PISA調査を始めるにあたって、主宰者であるOECDは、それまでの国際比較調査とは以下の点で異なることを明言した。

- * 単なる国の順位づけを目指すものでも、それぞれの国の生徒が学校カリキュラムを通して知識を単にどれだけ獲得したかを測定しようとするものでもありません。
- * PISA調査は、「読解力」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」といった概念によって、新しい能力・技能を見ようとする試みです。
- * 生徒たちが「過去に何をしてきたか」ではなく、習得した知識で「未来に向けて何ができるか」を評価するための調査です。

また、ここで想定されている「新しい能力・技能」については、以下のように説明している。

- * 読解力：自らの目標を達成し、効果的に社会に貢献するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力。
- * 数学的リテラシー：数学が世界で果たす役割を理解し、様々な生活場面で数学の根拠に基づき判断を行い、数学に携わる能力。
- * 科学的リテラシー：自然界の変化について理解し、意思決定するために、科学的知識を応用し、課題を明確にし、証拠に基づく結論を導き出す能力。

このなかで、PISA2009で重点が置かれ、わが国のランキング回復の象徴となった「読解力」について検討してみよう。

PISA調査における「読解力」は、次の四つの文節に分けることができる。

- ①自らの目標を達成し、
- ②効果的に社会に貢献するために、
- ③書かれたテキストを理解し、
- ④応用し、熟考する能力。

私たちが一般的にイメージする「読解力」は、このなかの「③書かれたテキストを理解する」に相当すると考えてよい。また、新学習指導要領において「言語活動の充実」が唱えられたが、

それは「④応用し、熟考する能力」にしかない。「①自らの目標を達成する」や「②効果的に社会に貢献する」については、ほとんど手つかずのままと考えてよい。

つまり、PISA調査が想定している学力の育成に向けた学習環境の整備は、ようやくその緒についたとは言えても明らかに道のり半ばである。

それでは、なぜ今回の調査でランキングに回復傾向が見られたか。ここからは推測に過ぎないのだが、文部科学省もコメントしているように「読書活動の充実」という施策がそれなりの効果を発揮したのだろう。

「朝読書」を実施している（課している？）学校は相当数にのぼると推計されている。多くの学校が朝の時間帯に読書を位置づけている。学校によっては、読んだ冊数をグラフに表示して競わせたりしている。「読解力」の向上に向けてそれなりの効果を発揮したというのは、それまで子どもたちの読書離れの傾向が著しかったからである。子どもたちをもう一度読書に呼び戻すという点では効果があったといえるのだろうが、PISA調査の「読解力」の定義に照らして、これではとても十分とはいえない。

PISA調査が回を重ねて4回目にもなると、出題傾向が次第に明らかになる。たとえ本旨は理解できなくても、同種の問題を作成して子どもたちに経験を積ませることはできる。そして、いわゆる受験対策を練り、子どもたちの正答率アップを目指したトレーニングが可能になる。幸か不幸か、わが国の教育界はそれが得意である。

蛇足ながら、このわが国の得意技は、東アジアの国々にも広がっている。国を挙げて正答率アップに向けた対策を講じることができる国ほど、トレーニングが成果を生み今回の調査で上位にランクされたと言ったら過ぎるのだろうか。

再確認すれば、PISA調査が意図しているのは、「過去に何をしてきたか」ではなく「未来に向けて何ができるか」であった。そのためには、自分はどんなことに興味や関心がありどんな可能性があるのか、それを知るためにじっくり腰を下ろして時間をかけて学び、社会に貢献しようとする意欲と実力を蓄えることこそが肝要である。

ランキングが回復したからといって、先の展望はまだ拓けていないことを承知すべきである。

◆これから考えるべきこと

PISA調査を重ねていくうちに、次第に鮮明になってきたことがある。それは、ランキングの上位国は人口規模が比較的小さい国だという事実である。

たとえば上位国の常連であるフィンランドは500万人であり、香港は700万人、シンガポールは440万人である。今回の調査で一躍トップに躍り出た上海も1000万人に満たない。(人口の計算の仕方には国籍取得者や在住者などによって若干の違いがある)

つまり、いずれも関東にある都県とほぼ同規模である。これは、子どもたちの学力向上という一点に向けて国民的コンセンサスが得られやすく、国を挙げて取り組むことが可能であることを意味する。

そのなかにあって、人口1億2700万人を抱えるわが国は健闘といってよい。PISA調査に参加している国で人口1億人を超えているのはアメリカやロシアくらいであり、それらの大規模国はずっと下位に低迷している。ちなみに、フィンランドと並んで上位に定着している韓国は4800万人であり、これも健闘の部類に属する。

しかし、国の規模が大きいわが国では、そこから発生する固有の問題がある。それは、今回の調査結果の集計によって明らかにされた最下位層が多いという事実である。

今回の調査で重点が置かれた読解力について、レベル1からレベル6に学力水準が分類され、それぞれの国における比率が算出された。このなかで「将来の生活に不安がある」とされる低位のレベル1・2に属するわが国の子どもたちは13.6%を数える。これは、韓国5.8%、フィンランド8.1%、上海4.1%と比べると、際だって高い数値であることが分かる。つまり、学力水準においても二極化の傾向が顕著なのである。

わが国の教育は、多くの人口を抱え、その全体の学力水準を向上させるためにさまざまな施策を講じてきた。学習指導要領が教育内容を定め、それに準拠した教科書を用いた教育は全国津々浦々の学校で行われている。そして、たとえば学力の低下傾向が問題視されると、学習指導要領の改訂という国家レベルで一律の改革が行われる。私た

ちは意外に気づかないのだが、このような例は思いのほか少なく、人口1億人を超える国のなかではほぼ例外中の例外といってよい。

しかし、ここに来て子どもたちの多様化が叫ばれるようになった。不登校は依然として13万人前後で推移し、診断技術の進歩も手伝って発達障害のある子どもたちの存在も注目されるようになった。学力向上も含めた世論の期待に押しつぶされるように、精神疾患で療養休暇をとる教員も史上最多になったと報告されている。

これは、1億人を超える人口を抱えるような大規模の国では、“一つの制度”でさまざまな問題を克服するのは限界であることを示している。

学習指導要領が掲げる指導内容をしっかり習得できないまま上の学校に進学する子どもの数はきわめて多い。かつて、「新7・5・3」と揶揄された現象があった。すなわち、指導内容をしっかり習得できていない子どもの割合が、高校で7割、中学校で5割、小学校でさえ3割もいることの喩えである。現状では、ほぼこの1割増しというのが私の見立てである。

このなかでも特に注目すべきは、中等教育に相当する中学校や高校の現状である。とりわけ高校では、一部の進学校を除けば学習指導要領準拠の教育でさえも成り立たない。それでもなお、大学進学率が5割を超えた状況に対して、私たちは一体何をすればよいのだろうか。

各国とも、PISA調査を契機にして教育改革に取り組むようになった。かつて訪問したアメリカでもシンガポールでも聞いた同じ言葉がある。

One fits all, One fits not all.

「だれにでも合うようなことは、結局だれにも合わない」という意味である。PISA調査は、単なる指標の一つに過ぎない。そこから読みとれるわが国に固有の問題にしっかり向き合うことなくしては、真の教育改革などできようもない。

【参考文献】

- ・国立教育政策研究所(2004) 生きるための知識と技能・OECD生徒の学習到達度調査(PISA)～2003年調査国際結果報告書～、ぎょうせい
- ・文部科学省(2010) OECD生徒の学習到達度調査～2009年調査国際結果の要約～

人は 人によりてのみ人となり得る

—学習者とは何か教育者とは何か人づくりとは何か—

淑徳大学名誉教授

カント（1724～1804・独・哲学者）の言葉である。
この言葉には、人が三度登場する。

最初の人は学習者としての人であり、第二の人は教育者としての人であり、最後の人は教育の目的としての人であるが、このことについて考えてみたい。

最初の学習者としての人は、子どもであるところさえ勝ちであるが、私は、子どもは勿論、親も教師も学習者であると考えている。人間は、それほど経験を積み重ね学びを拡充しても不完全である。不完全である自分を自覚すれば、よく生きたいとして求めて止まない心が生まれる。学習者とは、求める者に他ならない。

つぎに教育者としての人であるが、親や教師は勿論のこと、子どもも教育者であると私は考えている。一人の子どもを変えるのは、隣にいる子どもであるから、友達同士は学習者であるとともに教育者であるということになる。また、教育界には「子どもに学ぶ」という言葉がある。教師が教育の方法を子どもに学ぼうという謙虚さをもっていれば、子どもも教育者になる。この考えを更に進めれば、自然もまた教育者であり、「我以外、皆教師なり」ということになる。

このように考えると、子どもも教師も同じであることになるが、そうではなからう。

求めあい学びあう者同志としては、子どもも教師も同じである。然し、教師は子どもよりも求める心が切実で、知識が豊富で、ものの見方考え方が広く深くなければならない。教師の背景には、豊かな経験と学問がなければならない。それが教師である。

教師は子どもの遊び友達であると同時に学友であり、先覚者でなければならないのである。

授業開始や終わりに、礼の挨拶をするのは、教

師に挨拶するのではない。教師の背景にある豊かな経験や学問に尊敬の念を表す形が挨拶である。礼によって学問に尊敬の念をあらわし、求める心を高めるのである。剣道ではそれを気位を高めるという。

カントのいう「人によりてのみ」は、このように尊敬に値する人でもあらう。

最後は教育目的としての人についてであるが、これは人間とは何かにかかわっている。

『平成20年度小学校学習指導要領道徳解説編』には、「人間らしさ」という言葉がみえる。これは、人間の持つ弱さ・醜さ・本能と強さ・美しさ・理性を合わせ持つ性を指していると思われる。このように両面をもつ人間らしさをふまえた上で、強さ・美しさ・理性等の「人間のよさ」を高めることが道徳教育の目的であると述べているように思われる。

千徳廣史は、『人間の品格』で、横綱の品格の問題を取り上げ、人間の持っている闘争心(獣性)を、人間としてのよさをもってコントロールするところに人間の品格があり、それが、相撲界のきまりや形であると述べている。この品格は、相撲界だけではない。教育基本法に教育の目的として掲げている「人格の完成」も、品格を高めることであり、自己の獣性を制御することであると述べている。

このように考えてくると、人間のもつプラスの側面としての強さ・美しさ・理性等の「人間のよさ」を高めていくことが、人間の品性を高めていくことになり、それが、カントのいう教育の目的としての「人」であらう。

人間のよさの詳細は、『わが宇宙の心を拡充する』（新宮弘識著・日本道徳基礎教育学会創立40周年記念号・2008年）を参考にされたい。

人間一人を粗末にするとき 教育はその光を失う

——一人ひとりの子どもと真剣に向き合う

新宮 弘識

私が新任教師として赴任した福岡の小学校の教職員室に掲げられていた言葉である。

その前夜、父親からの餞の言葉「公平な教育者であれ」と重ねて読み、教育の原点に触れたように思った。以後、私はこの原点から逸脱することが多々あったが、その度にこの言葉が思い出され、私の「座右銘」の一つとなった。

この言葉の出典を調べたが、未だに不明である。従って、私独自の解釈であることをお断りして、私見を述べたい。

「人間一人」とは、一人ひとりの子どもを指すのではないと思う。「教育はその光を失う」とは、教育は失敗したら取り返しがつかない程、重要であるという意味であろう。一人の子どもを粗末にすれば、教育の光は消え失せてしまうという意味であろう。その影響を受けるのは、一人の子どもに止まらず全ての子どもであるから、教育の光が失われるのである。

問題は、「粗末にする」という内容である。粗末にするの反対語は「大切にする」であるから、「大切にする」について考えればよいことになる。

一人ひとりの子どもを大切にすることは、どういうことか。

まずは、一人ひとりの子どもがお互いに異なる家庭や環境で育ち、気持ちやものの見方考え方も異なるかけがえのない存在であることを認識することである。かけがえがないとは、その子どもに換わる子どもはいないということである。大切な宝ものを紛失しても新しく買い換えることができるが、一人の子どもは買い換えることはできないから、一人ひとりの子どもと真剣に向き合えということである。

子どもを大切にするには、子どもの気持ちや考え方をわかってもらうことによって始まる。子ど

もの話を最後までよく聞くことである。

現代社会は、他者の話の腰を折って自己を主張する風潮が蔓延しているように思われる。手を止めて相手の話を聞くというわが国の文化はどこへ行ってしまったのだろうか。人の話を最後まで聞くという謙虚さは、人を大切にしようとする心から生まれるのであるが、先ずは、教師がそうにして一人ひとりの子どもを大切にするように努めたいものである。然し、子どもの話を聞く段階に止まっているようでは、真に子どもを大切にしたことにはならない。

道徳の授業で、好ましくないとされる登場人物でも、その人の気持ちをわかってやるのが大切であるとして「どうしてそのようなことをしたのでしょうか」と話し合わせる大切であると主張する教師がいる。また、ねらいからはずれた子どもの反応もすべて認めてやるのが大切であるとする教育論を展開する教師もいる。

子どもや他者の気持ちをわかってもらうことは大切ではあるが、その段階に止まっているようでは、学びあって人間のよさを高めていこうとする教育は成立しない。望ましくないとされる登場人物やピントはずれの子どもの反応には、何が足りないかを吟味させたり、「私はこのように思うがあなたはどのように考えるか」と、先覚者としてよい生き方としての文化をきちんと伝えることが重要ではないだろうか。

子どもを大切にすることは、共感しあった上で、叱るべきは叱り、伝えるべきは伝えることである。それが、どんな子どもでも、よく生きたい高みに向かって生きたいと思っているという、子どもの可能性を信頼した教育であり、それこそが、子どもを粗末にしないことであろう。

1 年 主題名「いのち」の授業

光文書院『ゆたかな心』新資料

『31 ハムスターの あかちゃん』を使つての生命尊重の授業づくり
～自分の命は、うれしいことやしあわせなことをつくり出している～

栃木県足利市立坂西北小学校 佐々井 信子

1. はじめに 命を大切にすること

1年生の子どもにとっても、自分には命があつて、それによって生きていることは知っている。家では、「風邪をひかないように、早く寝なさい。」「交通事故にあわないようにちゃんと歩くのよ。」「学校では「けがをしないように気をつけましょう。」「一人ひとりがみんな大事ですよ。」と命の大切さについて聞かされている。子どももその通りだと思う。そのようにしなければとも思う。しかし、世の中を見てみると、人を死に追い込むまでいじめてしまう子どもがいる。そして、生きることは死ぬことよりもつらいと自分を死に追い込む子どももいる。なぜなのか。

楽しい毎日を送りたい。これが、だれもが望む生き方である。社会も、それを応援しようとする。

テレビでは、連日、楽しいバラエティ番組が笑いを誘ってくれる。ゲームが夢中になる機会を与えてくれる。便利な道具が生活を快適なものに支えてくれる。しかし、そのような楽しさや快適さは、命を大切に思う心を育てることにはならない。

思えば、大人の世界にも、いじめ、自殺、さらには虐待、D.V.があり、悩みは、より深刻である。命の大切さを自覚することは、大人とて難しいことなのである。

そのような状況の中、学校教育で、子どもたちに命が大切であるとの自覚を深めるのには、どのような方法があるのであろうか。

従来は、命は大切だ、だから命を守ろうという視点で命の大切さの自覚を促すことが多かった。そこでは命が大切であることは大前提とされてい

31

ハムスターの あかちゃん



ハムスターの あかちゃん うまれたよ。
うまれたばかりの あかちゃん。とっても ちいさいね。
おかあさんのおっぱいを、いっしょうけんめい すつてるよ。
けが はえて いないし、めも あいて いない。
だいじょうぶかな。ちゃんと おおきく なるのかな。

おかあさんが、あかちゃんを くちに くわえて いるよ。
あたらしい すに はこんで いるんだね。
おかあさんの まえばは、かたい ひまわりの たねを
ばりばり かんてしまふくらい つよいんだって。
でも、おかあさんは、あかちゃんを そつと

かんて いるみたい。まるで、だいじな たからものを
まもつて いるようだね。

うまれてから 十か たったよ。
あかちゃんたちの からだが、とても
おおきく なつて いる。

けが はえて、せなかの もようが よく わかるよ。
いびき、いびき、みんな ちがう もようなんだね。
あれえ、ときどき、かわい い あくびも するよ。

おかあさんのおなかに、みんな いっしょに くるまつて、
とても きもちよさそう。

ハムスターの あかちゃん、はやく おおきくなあれ。
ちいさい からだに、どんな ちがいが つまつて いるのかな。
みんなが、げんきに あるきまわるのも、もう すくだね。

※ 光文書院『ゆたかな心』31『ハムスターのあかちゃん』(文庫)による。



87

86

て、大切である根拠を明らかにすることなく、大切にすることのみが声高にいわれていた。それが、自覚の限界をもたらしえていたのではないだろうか。

そこで、新しく、命が大切であることの根拠を明らかにしていく授業はできないかと、資料に臨んだ。資料は、今年度から光文書院発行の副読本に所収されるようになった、「ハムスターのあかちゃん」である。この資料は、すでに文部科学省発行の道徳資料集に生命の学習用に掲載されていて、以前から知られている資料である。しかし、以前からある資料であっても、教師として新しい指導観をもって、授業を組み立てていけば、新資料となる。そして、そのことこそが、教師の力を高めるのに必要なことであろう。

資料では、生まれたばかりのハムスターの赤ちゃんのかわいいうす、そして、それを見守るお母さんハムスターのやさしいうすが、それを見ている子どもの目を通して描かれている。

これを見て、ハムスターの赤ちゃんがかわいいことをとりあげ、命の大切さの話題にすることもできる。しかし、かわいいことだけでは、命が大切であることの根拠を明らかにしていくことにはならない。赤ちゃんを見てかわいいと思うのは人間だけではなく、他の動物も同じである。いわば、生命あるものがその生命の中に内在している、本能に属することである。かわいいと思うことは、本能のもつ情に流されているにしか過ぎないのではないだろうか。

そこで、改めて学習指導要領を見てみた。1・2学年の本時にかかわる文言は、「生きることを喜び、生命を大切にすることを。」と、記されていた。

この文言を見ていて、気づかされることがあった。「生きていることを喜び」ではないのである。生きていることを喜び、では、生きるという作用から生まれるものを喜ぶことを指す。ではなく、その一歩前の、生きること自体にある喜びを明らかにすることが、生きることを喜ぶ、であり、それが、人間にしかできないことで、それを明らかにして子どもに伝えるところに心の教育があるのではないだろうか。学習指導要領にも、「自己の生き方についての考えを一層深め」とある。

近年、問題になっている、いじめ、虐待、自殺、等々の、命を軽視している出来事は、他の動物を凌駕する、高度に考えることができる心をもった人間に起きていることである。動物と同じような視点で、命の大切さを感じ取らせても、それを上回る人間のもつ意思の力でくつがえされることがある。それが人間なのである。

かつて、高学年の子どもたちの学級で、「今までにいじめを受けた人はいますか」と聞いたことがある。すると、三分の二以上の子どもたちが、堂々と手をあげた。次に、「では、いじめたことがある人はいますか」と聞くと、これもまた、三分の二以上の子どもたちが申し訳なさそうに手をあげた。

この子どもたちも、皆、動物の赤ちゃんはかわいいと思っているだろうし、いじめや自殺はよくないと思っているだろう。でも、生きてると、その通りには運べないこともあるのである。

それを、乗り越えることが、学習指導要領にいう、「自己の生き方についての考えを深める」ことによってできる、また、乗り越えることができるような子どもに育てたいと思ったとき、生命尊重の、授業のあり方も、新たな形を示しているのではないか。そんな思いで、授業の構成を考えた。

2. 授業の構想

資料には、動物の赤ちゃんを見る子どもが出てくる。その子どもの言動を、子どもたちに学ばせる素材としたい。

子どもにとって、動物の赤ちゃんを大事に思うお母さんのようすは、生活科で動物の世話をしている自分とも重なる。そして、資料をよく見ることで、ハムスターの赤ちゃんは、自分の生きること自体で、お母さんの喜びをつくり出していることに気づくであろう。それを起点にして、自分のことをふり返ると、自分が家庭の中でつくり出している家族の喜びにも気づいていくのではないだろうか。また、その家族の喜びは自分の喜びとなっていることにも思い当たるのではないだろうか。

そのような、家族間にある、生きることによって交わされている喜びの実態を知らせることで命の大切さへの理解を深めたいと考えた。

- ・家族っていいな
- ・お母さんにかまれても痛くない。気持ちいい。
- ・お母さん大好き。

<お母さんの気持ち>

- ・元気に大きくなってね。
- ・強くなってね。
- ・おっぱいをいっぱい飲んでくれてありがとう
- ・守ってあげるね。
- ・病気になるないでね。
- ・赤ちゃんがいてうれしいな。
- ・子どもが楽しそうだからお母さんも楽しい。
- ・子どもを見ていると、にこにこしちゃうよ。

この間、板書で、赤ちゃんの気持ちと、お母さんの気持ちが交差して、それぞれの気持ちができることがわかるように、書いてきた。子どもたちは、赤ちゃんの気持ちと、お母さんの気持ちが交流していることを、目の当たりにすることができた。

そこで、板書の全体をふりかえらせ、「ハムスターの命を感じることができたね。どんな気持ちになりましたか。」と問うと、次のように話してくれた。

- ・不思議な気持ちになったよ。
- ・心が優しくなった。
- ・ほっとしたよ。

これを、ハムスターの赤ちゃんの命がつくり出してくれたのである。資料を通して、ハムスターの命は、喜びを与えてくれたことがわかった。そこで、子ども自身のことに、話題を進めていった。

(4)自分の命がつくり出している、うれしいことを考える。

「みなさんにも命が……」と投げかけると、大きな声で「ある。」と返ってきた。そこで、板書を指示しながら、「自分と家の人との間にも、このような、命と命のつながりってありますか。」と問いかけた。

すると、「わたしがいるからうれしいって、お母さんが言っていたことあった。」と話す子がいた。くわしく聞いてみると、「妹が生まれてお母さんが赤ちゃんにかかりきりになったので、悲しくなっておこってないとき、お母さんがそう言ってだっこしてくれた。」と言う。弟や妹のいる子ども

たち数人がうなずいていた。そして、次のように、いろいろな事例が思い出されてきた。

- ・母の日に、絵をあげたら、喜んでくれたよ。
- ・お母さんありがとうって思った。
- ・一緒にお風呂に入ったとき、楽しかった。

ここで、叱られたことにも、目を向けさせた。すると、次のように思い出した。

- ・ゲームしていたら叱られて、いやだった。
- ・お風呂に入りなさいって、起こされたよ。

そこで、なぜ、お家の人は叱ってくれるのかを考えてみようとなげかけると、次のように言った。

- ・いい大人になるように。
- ・好きだから。

子どもは、お母さんが叱ってくれたことも大事なかかわりだったということに気づいた。

そこで、次の問いを投げかけた。

「家の人が喜んでくれるときはどんなときかな。」

- ・一緒に遊んでいるとき
- ・病気が治ったとき
- ・お手紙をあげたとき
- ・おてつだいをしたとき
- ・自分が笑ったとき

子どもたちは、それぞれの家庭で、親とかかわり、自分の命がつくり出しているうれしいことを思い出していった。

5. おわりに 授業を終えて

楽しいことと、うれしいこととは違う。楽しいこととは、心の中にほがらかさや気持ちの高ぶりが充満していくことである。うれしいこととは、そのようになったらいいなと思っていることが実現して心が明るくなっていくことである。

子どもは、授業を通して、自分の命が親の心にうれしい気持ちをつくり出していたことを、改めて感じる事ができた。また、そうやって親に喜んでもらえたことが、うれしかったことも、改めて思い出すことができた。自分が生きる、命の価値を、新たな視点で見ることができるようになったのではないだろうか。

このように、ものの見方をトレーニングしていくことが道徳の時間の役割であると考える。

4年 主題名「やりとげる心と力」の授業

光文書院『ゆたかな心』の新資料

『26 ノーベル賞の生みの親～アルフレッド・ノーベル～』を使って

沖縄県浦添市立港川小学校教諭 古波藏 尚子

1 はじめに

子ども達は、家庭・学校・地域の中で様々な「人・もの・事」に出会い、「〇〇ができるようになりたい」「〇〇のようになりたい」等、身近な目標やあこがれを抱き、達成に向け自主的に取り組むことができます。それは、今よりよくなりたい、よりよく生きたいと思う心の表れでしょう。

しかし、その思いも失敗を繰り返したり、すぐに成果が現れなかったりすると、やる気を失い途中であきらめてしまうということが起こります。そして、途中であきらめてしまうという経験を何度も繰り返すことで、自信を失い、夢や目標までも見失ってしまう要因にもなるのです。

そこで、子ども達が、よりよく生きたいという思いを持ち続け、自分の夢や目標に向かって努力し続けるには、「しっかりした目標を持ち、達成するにはどうしたらよいか考え、失敗しても粘り強くやり遂げること」の価値について考えることが大切だと思います。

本資料は、どんなに失敗してもあきらめることなく研究し続け、偉業を成し遂げたノーベルの話です。繰り返し失敗してもあきらめずやり通すことができたのはなぜか、ノーベルの心や力について考えることで、「夢や目標を持つことの大切さ」や「繰り返し失敗しても決してあきらめず努力し続けることで成し遂げることができる」ということを知ることができます。また、自分との相違を考えさせることで、自分事として捉え、価値の理解を深めることができるものと考え、授業を実践致しました。

2 主題のねらい

◎人には、あきらめずに探求し続けることで何かを成し遂げることができる力があることに気づき、目標に向かって努力しようとする意欲と希

望をもつ。

*ノーベルのように、何度も失敗と工夫を繰り返すことで何かを成し遂げることができることがわかる。

*そのような力は自分にもあり、自分を伸ばす大事な力であることに気づく。

*自分にも何ができるか、何がしたいのか考え、それに向かって努力しようという意欲をもつ。

3 授業記録

(1)これまでの経験を発表する。

T：これまで、目標を立ててやりとげた経験、または、目標は立てたけど途中であきらめてしまった経験のある人発表してください。

C1：レギュラーになりたいから、サッカーの練習、休まずがんばっています。

C2：甲子園に出て、優勝したいから、野球の練習がんばっています。

C3：今年、水泳25メートル泳げるようになると目標決めたけど、達成できませんでした。

(2)資料を読み、価値について話し合う。



資料は教師が読み、子ども達は、テレビ画面に映し出された挿絵や文字をみながら話を聞くという方法で行いました。

また、資料の内容を把握する場面では、挿絵やフラッシュカードを貼り付けながら確認し、ノーベルの心の動きを線で描き、失敗を繰り返しながらも研究を続けたことが捉えやすくなるようにし



ました。

T：ノーベルが、失敗を繰り返してもダイナマイトを発明することができたのは、どうしてでしょう。

C4：安全に使えるようにしたい。

C5：世界が平和になって欲しい。

C6：弟を亡くしたので、二度と同じ不幸な事故が起きないようにしたい。

C7：弟のためにも多くの犠牲になった人のためにも、このままではいけない。

C8：自分の目標をしっかり持って、絶対にあきらめないという強い気持ちがあった。

C9：自分の成功をみんなが待っている。

T：みんなが、発明を待っていると思うと頑張ろうという気持ちになるのですね。(うなずく)

C10：みんなノーベルならできると思っているから、何とかしようとやる気を起こした。

C11：自分にはできると自信があったから、研究を続けることができた。

C12：失敗しても、決してあきらめなかった。

C13：ニトログリセリンを安全に運べるようにしたいという目標をしっかり持っていた。

C14：失敗しても粘り強く努力した。

C15：目標に向かってあきらめないという心を持って11年も努力を続けた。

C16：みんなの平和のためにぜったいあきらめないという気持ちをもっていた。

C17：ぜったいに成功させたいと思っていた。

C18：弟の分もがんばろうと思った。

T：ノーベルがダイナマイトを発明できたのは、「自分の目標をしっかりもっていたこと」、「失敗しても決してあきらめない心や成功させたいという強い意志をもっていたこと」また、「自分にはできるという自信をもっていたこと」等、がその秘密だったのですね。そして、その心を支えていたのは、「みんなが平和や安全に暮らせるようにしたい」「弟の分もがんばろう」「みんなが自分の発明を待っている」等、自分のことだけでなく、周りの期待や応援、期待に応えたいという思いも、発明を完成させる力、やり

通す力となったのですね。



(3)自分と比較しながら考えを深める。

T：ノーベルとみなさんの似ているところや違うところはありますか。

C19：目標を持ってがんばるところが似ている。

C20：私は、目標は立てるけど、実行していないので、そこが違う。

C21：失敗したらあきらめてしまうので、そこは違うけど、私もノーベルみたいに世界が平和になって欲しいといつも思っている。

C22：ノーベルみたいに目標を持っているところ。

C23：今、ぼくは、サッカーのレギュラーになろうとがんばっているのだからそこが似ている。

(4)あきらめずやり通す力を使って、どんなことをしたいかワークシートに書く。

T：ノーベルのように、あきらめずやり通す力を使って、どんなことをしたいか考え、ワークシートに書いてください。書き終わったら、隣の人やグループの人に、自分の考えを伝えてください。

C24：テストの時、「何だったっけ忘れちゃった」というとき、すぐあきらめないで、じっくり考える。

C25：平泳ぎができるようになりたいです。

C26：勉強をちゃんとしてテストで、百点を取る。

C27：サッカー選手になりたい。

C28：アメリカでプロのバスケットの有名な選手になりたいです。

C29：車を作る人になるために工作をがんばる。

C30：野球でレギュラーをとるために練習をがんばって、プロ野球選手になって、ぼくが目指している小笠原選手をぬきたいです。

C31：学校の先生になるために、家庭学習を毎日ちゃんとやりたいです。

C32：自分のおじいちゃんの病院を引き継ぎます。



(5)今日の学習を通して、大切だなと思ったことをワークシートに書く。

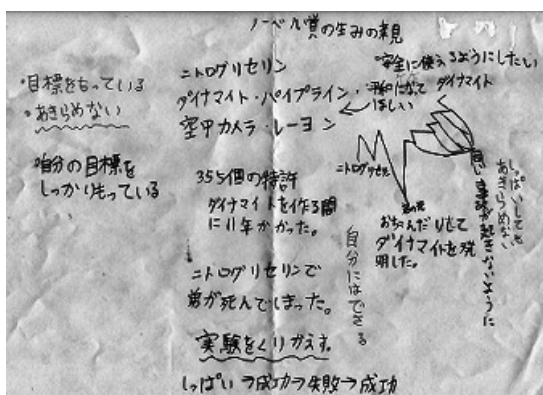
下記の表は、子どものワークシートからの抜粋です。本時の授業を通して、大切だと思ったことを書かせることで、どのような変容があるかそれぞれのの子の考えの深まりを知る手立てとしてワークシートを活用致しました。

C24	あきらめないってということは、とても一人ひとりに大切なことだとわかりました。
C1	あきらめずにがんばると言うことが大切だと思った。
C31	目標をもち、あきらめないということが大切だなと思いました。
C7	勇気が大切。
C27	努力が大事。
C15	あきらめずに、何でもやり通すことは大切だなと思いました。そしたら、ノーベルのようにできると思いました
C26	あきらめずに、やり通す事が大事。
C33	夢をあきらめずやり通したい。
C34	あきらめなかったら、何でもできると思った。
C3	自分のことだけでなく、みんなのことを思うことが大切だと思いました。
C12	目標をしっかりと立てて、どんなに失敗してもあきらめないようにしたいです
C32	あきらめたらその時点で夢をあきらめるということになるから、あきらめません。
C35	あきらめなかったら夢がかなうから、あきらめないことが大切。

4 考察(まとめ)

(1)授業後の子どもたちの声

授業直後、C8「これ、今日の授業を記録したものです。今日の道德の授業、わかりやすくおもしろかったです。僕は〇〇中学校へ進学することが、今のぼくの目標です。今日の授業で、目標持ってがんばることや、あきらめないことが大切だとわかりました。中学校進学という目標に向かってがんばります。ありがとうございました。」下記が彼の記録です。



他の子は、ワークシートを提出する際「ありがとうございました。」「私はトリマーになる夢に向かって、毎日ペットのお世話ががんばっています。」「今日の授業、とても勉強になりました。考えることは難しいけどとても楽しかったです。また来てください。」等、目を輝かせながら話しかけてくれる優しい子ども達でした。

(2)参観しての感想(担任：宮里先生)

資料を大型テレビに投影することで、子ども達が、全員集中して話を聞いていたので、資料提示の仕方は良いと思いました。

内容把握の場面で、挿絵とキーワードの言葉を提示し、それに心情線(?)を描くことで、一度で聞き取ることができない子も、考えることができるので、心情線(?)を使うのは効果的でおもしろいと思いました。

本校の「ゆらぎ」をどこで作ればよいか、考えながら授業を参観していました。

(3)本時を振り返って

今回の授業は、宮里章子先生の学級での飛び込み授業でした。

授業を実践する際、資料提示の仕方・資料の内容把握のさせ方、発問、話し合いの仕方、考えを

整理させる方法の5つを視点に取り組みました。

① 資料提示の仕方について

大型テレビを活用することで、全員が画面に集中し話を聞くことができます。しかし、聞く力は個人差があるので、資料内容を想起させる工夫が必要です。

② 資料内容を想起させる方法について

挿絵やフラッシュカードを黒板に貼り、ノーベルの心の動きを線(心情線)で表しました。そうすることで、ノーベルが何度も失敗を重ねながら研究を続けた事をしっかり捉え、「やり通す心や力」について考えを深めることができた事が、子どもたちのワークシートの言葉(前ページの表)からうかがえます。

③ 発問について

発問は、自分事として捉え考えることができるようにするため、導入では成功や失敗の経験を想起させました。中心発問は「ノーベルが、失敗を繰り返してもダイナマイトを発明することができたのはどうしてでしょう。」とし、「やり通す心や力」について考え、ノーベルと自分達との相違を明確にしました。そして、ノーベルのように「やり通す力」を使って、どんなことをしたいか考えさせることで、自分の目標や夢について改めて見直し、やる気を思い起こさせました。

④ 話し合いについて

一斉、ペア、グループと、様々な学習形態で考えを交流させたいと考え、促しましたが、活発に考えを交流するまでには至りませんでした。

⑤ 考えを整理させる方法について

ワークシートを活用し、考えが整理できるようにしました。一人ひとりの夢や目標、大切にしたいことをワークシートに書かせることで、考えを整理することができました。

今回の授業は、教師用指導書の展開例を基に、途中であきらめてしまうという子ども達の実態を踏まえ、中心発問を変えて展開してみました。

事後の取り組みをみるとことはできませんが、本授業をきっかけに、「あきらめずやり通す力」をいろいろな場面で使い、よりよい自分を目指してくれることを期待しています。

最後に、資料提示した大型テレビとシート、宮里先生の感想の中に出てきた本校の捉える「ゆら

ぎ」を下記に掲載いたします。

今後も、子どもたちのよりよくなりた、よりよく生きたいという思いが膨らみ、実現したいという意欲や、元気が出るような道徳の授業をめざし、実践していきたいです。



5年 主題名「くじけない力」の授業

光文書院『ゆたかな心』の新資料 『28 世界一の技術』を使って

石川県小松市立能美小学校教諭 北川 忠

1 はじめに

5年生の子どもたちは、努力が大切であることはわかっている。努力しなければ何事もなしえないことも知っている。しかし、現実はどうだろうか。どんどん上達する友だちと自分を比較して、「どうせ自分はだめだ。」と悲観して、努力することをやめてしまったり、せっかく立てた夢をあきらめてしまったりすることがある。道徳の授業で、困難を克服し、あきらめずに努力を続けることで成功した人物を取り上げ、子どもたちに努力の大切さを気づかせることは意味のあることであるが、「そうはいつでも、自分にはできないよ。」という子どもたちの本音はなかなか授業に現れてこない。

だから、子どもたちが心から「もう一回がんばってみよう。あきらめてはだめなんだ。」と将来に向けて、前向きな気持ちになれるような授業がしたいと思った。

2 資料について

世界に誇る日本の技術力。その一翼を担っているのは、町工場である。岡野雅行氏はその代表者ともいえる人物で、「カリスマ職人」としてマスコミに紹介され、講演活動も幅広く行っている。

画期的な「痛くない注射針」をはじめ、携帯電話の小型バッテリーケースなどの不可能を可能にする職人技は常に世界から求められている。

岡野氏の魔法のような技術力は、今までに何度も失敗した経験の積み重ねによって生みだされている。そこで岡野氏の言葉と「失敗は成功のもと」の意味を合わせて考えることにより、失敗は成功の一手手前なのだから、あきらめてしまったり、もったいないと気付かせることができないかと考えて、授業を組み立てることにした。

3 資料を効果的に活かす事前の手立て

だれもが「無理、不可能」といった痛くない注

射針を岡野氏が「絶対にできる。」と確信した理由は、過去に積み上げた「失敗から学んだ成功体験」である。ならば、自信を失っている子どもたちには成功体験がないのだろうか。自転車に乗れるようになったことや掛け算の九九がいえるようになったこと、泳げるようになったこと、もっと以前ならば、歩けるようになったことなども子どもたちが持っている成功体験である。初めはまったくできなかったことを、「できるようになりたい」という強い意志で、できるようにしてきたはずである。そこで、事前に今までにできるようになったことや今、できるようになりたいと思ってがんばっていること、周りから無理だといわれても、できるようになりたいことや、成し遂げたいと思っている目標について調査することにした。

くじけない力

名前

今までに、習得してできるようになったこと・・・ 自転車に乗れる。
かけ算の九九がいえる。

A

今より、もっとうまくできるようになりたい
と思っ、がんばっていること

B

まわりから、「な、り」と言われているが、ど
うしても「実現したい」と思っていること

今は、辛くてきついけれど、これから、でき
るようになりたいなと思っていること

C

この調査資料は、あとから授業の中で使用することは知らせず、自分の成長と現在を見つめるつもりで記入させ、回収しておいた。

4 本時のねらい

- ◎より高い目標実現のために、自分の中にあるくじけない力に気づき、精いっぱい努力して、最後までやりぬこうとする。
- ・岡野さんが「痛くない注射針」を完成させるまで、失敗をくり返しても「絶対にできる」と信じてあきらめなかったことに感動する。
- ・「痛くない注射針」完成の裏には、何度も失敗してきた経験の積み重ねがあることがわかる。
- ・自分にも岡野さんのように何度失敗しても、できるまで続けた「くじけない心」があることに気づく。
- ・自分もより高い目標を立て、それに向かって努力を重ねていこうとする意欲を高める。

5 指導案

下記の表 参照

6 導入・映像の活用

他人が注射している様子を見るだけでもその痛みが伝わってくるものだ。そこで、この「痛くない注射針」を実際にうでにさしている映像を見せることにした。ビデオの中では一般の注射針と比較して、かなり細い針の様子が映っている。

そして、その針を実際にうでにさし、「本当にささっているの。」と驚いている人物は、子どもた

ちもよく知っている元首相、小泉純一郎氏である。小泉元首相の驚きは、そのまま子どもたちにも伝染した。「へえー。」「すごいな。」あちらこちらからつぶやきが聞こえてくる。つかみはオーケーだ。

7 展開・前半授業記録（一部抜粋）

- T：感想を聞かせてください。
- C：不可能を可能にしてきた人だ。
- C：何でも作れる人なんだなあ。
- C：最後の言葉が印象的でした。
- T：職場の人からも「今度は無理」と言われ、大学の先生からも「不可能」と言われたのに「絶対にできる」と思ったのはなぜだろう。
- C：自信があったから。
- T：どんな自信。
- C：今までにも不可能と言われた製品を可能にしてきたから、その経験が、自信になったと思います。
- C：私もそう思います。自信があるから「絶対にできる」と思ったと思います。
- T：なるほど。今までの経験ですか。
- C：ぼくは、小さい子どものためにも、今までの技術を使って作ってあげなければならないという強い気持ちもあったと思います。
- C：注射の苦手な人のためという気持ちもあったと思います。
- T：苦手な人はどれくらいいるのかな。
- C：ほとんどだよ。ね。(笑)
- T：痛くない注射針がほしいと思う、多くの人たちの期待も背負っていたということですか。
- C：人のためになるいいことだから、何があって

主な学習活動	指導の方法
①痛くない注射針についてのビデオを視聴し、具体的なイメージを持つ。 ②「世界一の技術」を読み、岡野さんがどのようにして不可能を可能にしたかを考える。 ・失敗してもあきらめなかった理由を話し合う。 ・「失敗は成功のもと」について考える。 ③自分の中の「くじけない力」に気づき、失敗を活かして努力しようという意欲を持つ。 ・今までできるまでやりぬいた経験を話し合い、目標に向かって努力しようとする。	●普通の針との比較や実際に使っている場面を視聴させ、製品について理解させる。 ●岡野氏が今まで失敗経験の積み重ねによって不可能を可能にしてきたことに着目させ、失敗は敗北ではなく、成功の一手手前であることに気づかせる。 ●失敗は成功のために必要であることに気づかせる。 ●なりたい自分の姿や将来の目標について見つめ直させ、失敗や行き詰まりがあってもあきらめずに挑戦しようとする意欲を持たせる。

も創ってやろうとがんばった。

C：お金じゃないよね。

T：そうか、使命感という気持ちですね。みなさん、「失敗は成功のもと」という言葉を聞いたことがありますか。

C：失敗を活かしていけば、成功する。

C：失敗して、やめてしまえばそこで終わりだけれど、失敗の原因を考えて次に活かすということです。そうすれば成功する。

T：なるほど、だから「成功のもと」なんだね。ならば失敗はだめなことですか。

C：失敗は、だめはだめだけど、活かせばだめじゃない。

T：失敗をそのままにしているのはだめということなんだね。

C：失敗を活かせば、もしかしたら、次に成功するかもしれない。

T：失敗は成功の一步前かもしれないね。

8 展開・終末

岡野さんの資料から学んだ成功の秘訣を、子どもたちが自分のものとするために、以前記入しておいた調査用紙を配布する。

T：さて、この前、みなさんに書いてもらった紙を見てください。ABCの三項目に分かれていますね。Aは「練習してできるようになったこと」Bは「もっとうまくなりたいと思ってがんばっていること」Cは「まわりから無理といわれても、実現したいと思っていること」ですね。Aを見てください。今までにできるようになったことがたくさん書いてありますが、それは初めからすぐにできたことですか。

C(全)：いいえ。

C：一輪車も、「乗りたい」と思って毎日練習しました。できるようになったとき、うれしかった。やったーと思った。友だちもいっしょによるこんでくれました。

C：奥の細道を暗記するとき、初めは「こんなの無理」と思ったけれど、みんなとがんばっていたら覚えられました。(※本校では名文暗唱という課題を全校で取り組んでいる)

T：できるようになりたいという気持ちを持ち続けてがんばったから、こんなにたくさんのこ

とができるようになりましたね。話を聞いてみると、がんばり続けるには、自分だけではなく誰かの応援も必要なのかな。

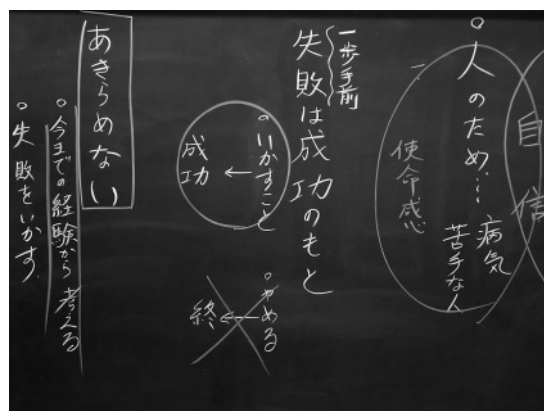
C：一人だと、くじけるかも。

C：友だちといっしょにならなればるし、応援もあったほうがいいと思うけど、やっぱり自分が「したい」という気持ちが一番です。

T：Aを見るとあなたの中には、できるようになりたいと思うことを実現させる力がこんなにあるじゃないですか。できるようになるまでがんばる力、「くじけない力」ですね。岡野さんもこの力を持っている人ですが、「痛くない注射針」を創ろうとした初めのころは。

C(全)：Cです。無理といわれた。

T：そうです。無理だ、不可能だといわれても、「きっとできる」と思い、何度失敗しても失敗を活かしてついに、完成した。みなさんも、みんなの中にある「くじけない力」を発揮して、今は難しいこと、不可能に思えることを可能にできるかもしれませんね。



9 ワークシートより

くじけない心

1月 19日 名前

自分の中にも「くじけずがんばる力」があることがわかりました。
「がんばる力」は「ねがい」をかなえる力です。
これから、うまくいかないときや、失敗したときに「あなたの中のがんばる力」を働かせて、ぜひ、ねがいをかなえてください。

今日の勉強をした感想を書きましょう。

くじけずがんばる力がほんとにあると知り、これからは、
なんでもすぐあきらめず失敗をバネにしていろんなことを
がんばりたいと思いました。
だれかに無理不可能と言われてもがんばる力があ
れば不可能が可能になることが分かった。ど
ろ野さんのようにそのあきらめない力がとても強い
人になりたいと思いました。

いつも「もうだめ、できない」とあきらめて
いて、失敗したら「あー、もう無理」と言っ
ていたけれど、失敗を次に活かすと成功する
とわかりました。あきらめていたら何もでき
ないということがよくわかりました。私も無
理と思ったことを可能にしたいです。

私は失敗したら、少しあきらめていたと思
いました。でも今までできたことは、「やりた
い」と思ったことを練習したり、失敗したま
まじゃなく、失敗を活かしてきたからでき
たんだと思いました。

Cには、とてもできそうにないけれど、かな
えたらいいなという気持ちで書きました。今
日の勉強で本当になえられるかもしれない
という自信ができました。



願いは「自分の中のがんばる力」でかなえら
れるんだとわかった。失敗はそのままにしま
いで活かしていけば成功につながるから、な
らいごとの野球につなげていきたい。

成功するためには失敗が必要となきがあり、
その失敗を活かすか、あきらめるかによつて
成功に届かないか届くのかが決まる。また、
その失敗を活かすには経験も必要だと思いま
した。このくじけない心をこれからの失敗や
生活につなげていこうと思います。岡野さん
を見習いたいです。

10 まとめ

授業の中でも子どもたちは言及しているが、あ
きらめず努力を続けるには、周囲からの励ましも
大切である。実際に子どもたちは今までも家族や
友だちから励まされ、または無言の励ましを受け
てやりとげたことが多い。今回の授業で、私は子
どもたちの応援団になろうと思った。「やればで
きる。あきらめるな。」という気持ちを伝えたかっ
た。それを耳慣れた言葉だけに終わらせないため
に、子どもたちの中にある「くじけない力」に気
づかせてあげたかった。

高学年であるから、自らが目的達成に向けて強
い意志を持つことが大切であると自覚させること
ははずせないが、「できるかもしれない」という
希望がもてれば、より意欲的に取り組むことがで
きるのではないだろうか。これから人生の荒波を
乗り越えて数十年生きていく子どもたちにくじけ
ない力をもってほしいと願う。

最後に読みながら、思わず「がんばれ」と声が出
てしまった一人の子のワークシートを紹介した
い。

一番印象に残ったことは、「あきらめないこ
と」です。だれに何と言われても自分を信じ
努力することが大事です。そして、自分のこ
とが全部完璧にできるようになったら、次
は周りの人のことも考えて何事も取り組みた
いです。「夢はかなうものじゃない。かなえ
るもの」です。夢は待っていてもかないませ
ん。夢をかなえるためには努力し、あきらめ
ないことだと思います。

川柳を道徳に活かす③

～川柳を通して自分を見つめる～

習志野市立谷津南小学校教諭 松田 憲子

今回は日々の川柳の積み重ねから、自分の成長を見つめた実践である。

①クラスの成長・自分の成長を振り返る～川柳

二学期、日々の思いを残すために、川柳作りで一日を振り返ってきた。大きな行事が一区切りついた11月末、クラスや自分たちの成長を、川柳を通して見つめる授業を行った。

書きためた川柳から一人一句選び、全員の川柳を資料として提示し、話し合った。

六年生 新しい名札が 輝いている
縦割りで「リーダー」と呼ばれ「あ！六年だ！」
運動会 みんなの涙が あふれてた
長縄で 最高記録を 出せたんだ！

「みんなで協力できるようになった」「注意し合えるようにもなった」と、クラスの成長を共感し合うことができた。クラスの成長は、一人ひとりの成長があってこそである。「クラスがこんな風に成長できたのは、どうしてだろう？」と問いかかけ、「前は人の話を聞かなかったけれど、我慢できるようになった」「6年になって積極的になった」等、自分も成長していることに気付かせた。

②お互いの成長を認め合う

①の授業後、互いの成長を認め合った。一人ひとりの顔写真を中央にしたワークシートに、その子の成長したところを学級の全員が書いていった。

それをもとに道徳。子どもたちは友達からのメッセージに「自分が努力したことが認められてうれしい」「何気ないところまで見てくれてるのがうれしい」と感想を話し合いながら、前時で気づいたクラスの成



長が、自分の成長と重なることを実感したのである。

③自分で自分を振り返る～川柳

二学期の終業式に自分の成長を見つめて一句詠み、その思いを文で綴った。(以下の通り)

前向きに 進んできた足跡 数知れず

いろんなことがあったけれどそれを活かすことができた。一つ一つが大きな思い出として積み重なって、そして今の私があると思う。

自分のね 心の種が 芽生えたよ

六年生の初めにまいた心の種は、学んだり体験したりしながら、少しずつ芽を出してきたと思う。みんなとの協力も、種の芽生えに大きく影響したと思う。

ますますね 絆が深まる みんなとの

もっとみんなのことがわかってきて、ますます絆が深まった気がした。1学期と比べても、みんなで協力し合えることが多くなったと思う。

2学期は「がんばった」が いっぱいだ

2学期はたくさんの行事でがんばった。リーダーとして、6年としてがんばってきた。それは自分だけでなくみんなも同じだ。みんなでがんばった2学期だったと思う。

自分を見つめた作品や友達の中の自分を意識した作品、まだ自分の成長がつかみきれない思いを詠んだ作品もあった。どれも川柳作りを通して、確かに自分を見つめることができたのである。

④川柳作りは「心のアルバム」

子どもたちは日々たくさんの川柳を詠んできた。川柳を詠むことは、その日や行事を振り返って、自分の心を整理することであったり、心に生じた思いを言語化することであったりした。

作文はビデオのように状況を詳細に表し、川柳は写真のようにさまざまな一瞬一瞬を映し出す。その一瞬の写真に込められた思いは、時にはビデオよりも鮮明に伝わり、想いがよみがえる。

川柳作りは、子どもの一瞬・そのときを的確に捉えた「心のアルバム」なのである。

人間関係づくりの演習を活かす③

～「ありがとう・どういたしまして」のキャッチボールで温かい人間関係づくりを～

市原市教育センター所長 土田 雄一

人間関係は「言葉のキャッチボール」から

人間関係づくりにコミュニケーション力は重要である。まずは「言葉のキャッチボール」ができること。今回は、「ありがとうの き」(1年)を活用した温かいコミュニケーション力の育て方を紹介する。上学年でも活用できる演習である。

「ありがとうの き」で温かいコミュニケーションの築き方を学ぶ

「ありがとうの き」は、感謝の言葉「ありがとう」と言った人に対して、「どういたしまして」の言葉を返すことから、双方向の温かい人間関係を築くことができるようにする演習である。

て」と返すことで、「ありがとうの き」の赤い実ができることをイメージしている。

発展として、「ごめんね」を言う場面と、「ごめんね」と言われたら「なんと返す」のか、言葉を考えさせるとさらに温かい関係づくりができる。

言われた時の気持ちがわかり、相手を思いやる言葉の大切さに気づくだろう。

世界に通じる言葉のキャッチボール

英語で「Thank you」と言えば、相手は「You're welcome」「Not at all」と返す。まさに「ありがとう」「どういたしまして」の言葉のキャッチボールなのである。

1 演習のねらい

- ・日常生活でお互いに「ありがとう」を自然に交わすことから、温かい人間関係づくりをする。
- ・友だちへの感謝の心を育てる。

2 活用のしかた

- ①「ありがとう」を言ったり、言われたりした場面を思い出させる。「感謝の気持ち」が込められた言葉であること。言われたらうれしい言葉であることを押さえる。
- ②「ありがとう」と言われたら「どういたしまして」と返す練習をする。相手の言葉を受け取って、温かく返す基本としたい。
- ③副読本の13ページのシートを活用して、帰りの会などで、「ありがとう」と言えたら黄色で色をぬり、「どういたしまして」と返すと赤い色を塗らせるとよい。これは、「ありがとう」が花で、「どういたしまし

道徳に役立てる～「形」から「心をこめて」に

1年10「ほくに もたせて」は、おじいちゃんの荷物を持つ手伝いをするたろうくんの話である。おじいちゃんはきっと「たろうがもってくれて、ほんとうにたすかったよ」の後に「ありがとう」と言っただろう。それに対してたろうくんがなんと答えたか考えさせるとよい。「ありがとうの き」の学習を継続していれば、「どういたしまして」と答えたことが容易に想像できる。

同様に21「わたしに できる こと」では、おかあさんが入院したとき、手伝ってくれたべいちゃんに対して、おとうさんが「ありがとう。たすかったよ」と言う。それに対してどんな気持ちでどんな言葉を返すか考えさせるとよい。ここでも「どういたしまして」が大切な言葉として確認できる。

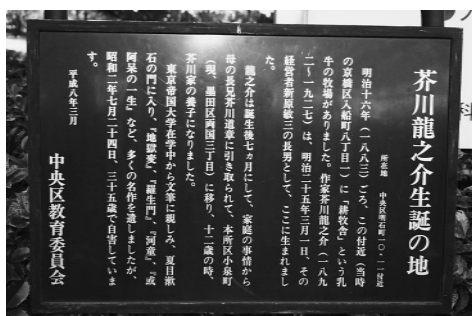
「ありがとう」「どういたしまして」の「言葉のキャッチボール」は「形」から始まり、世界につながる「心のキャッチボール」へと発展していくのである。

文学的・国語的・道徳的読み

～芥川龍之介『杜子春』から～

芥川龍之介

芥川龍之介・1892～1927(明治16年～昭和2年)。「龍之介」という名前は辰年・辰の月・辰の日・辰の刻に生まれたことに由来するというのは有名な話だろう。



芥川は幼いうちから母の実家である芥川家で育つこととなる。文化的素養・感覚は特にこの芥川家の家系に拠るところが述べられる。通った小学校(現両国小学校)は芥川家のすぐ近くにあり、敷地には『杜子春』の一節が彫られた文学碑とその説明板が建つ。



両国小学校に建つ文学碑

文学的な「読み」

『杜子春』は、芥川の蔵書の中にあった『唐代伝奇「杜子春伝」(李復言作)が原典といわれる。芥川の再話と原典との違いとして、結末の改変について比較・考察することが、たびたびなされる。

原典の杜子春は仙道への道へと進む最中で、かなり凄惨な結末を迎えるようだ。

芥川の再話は、『赤い鳥』への寄稿だったこともあり、子ども向けに道徳的に作られたことは容易に想像できる。

そして、親への愛情を何よりも優先させる行為から、芥川自身と幼くし離れて暮らし亡くなった母親との関係性を背景に読み解くこともある。

作品に作者の人生背景を重ね、作品の記述(文章・言葉など)との相関から、言葉では表現されていない行間の内容すらをも読み解くこと。それが「文学的読解」では必要となる。つまり、作者の人生・思想や社会的背景を、作品に書かれている内容にも投影させ、それらを抉り出すように究明することが、「文学的な読み」ではないかと思う。

国語的な「読み」

作者の人生や過ごした時代・社会をも含み読むことが、「文学的な読み」であるとしたら、作品の記述にこだわりきって読む読解が「国語的な読み」となるのではなかろうか。この読みが、世間一般のいわゆる「読解力」には相当するだろうか。そして、「作品」に対する極めて一般的な「読者」ともいえるだろう。中学・高校と進む段階で「国語」では、徐々にその「読み」に文学的要素も含むことがあるようだ。だが、この段階では(試験での時間的制約などもあることから)深く「文学的な読み」を学ぶことは難しい。あくまでもならし運転的な訓練段階で多くは留まろう。どちらにしても、作品・文章を読み込むことから内容をうかがう行為が「国語的な読み」だと言えようか。

道徳的な「読み」

翻って、道徳的読みは“読み手”の「考え」とその「心」が拠り所となる読解だと思う。一定の内容理解をし、そこから自分が何を考えるか、そして何を学ぶかである。それぞれの道徳観によって各自がさまざまな意見を持つことになるだろう。さらにはそれが「行動」として発露されることが望まれる。それは、作家と読者のシンクロによる

世界観の共有よりもむしろ、個々の抱く考えであり思い・意見が重要な読みだ。ただし、前提条件として、作品をある程度理解しておく読解力は必要になってくる。つまり、ある程度の「国語的な読み」（＝一般的な読解力）を経た上でなければ、「道徳的な読み」もできず、ともどもに、死に体となってしまふ。

これは、道徳資料の読解への負担軽減という発想とも絡む。むしろ、読解力が高いにこしたことはないが、かといって過度の読解への負担は、道徳資料の核心へ入る時間を失ってしまう、そういう考えである。

『杜子春』に見る道徳的価値

『杜子春』という作品において大きなポイントとなるのは二つ。一つは、杜子春によって繰り返される放蕩行為と、もう一つは、仙道を志すことを決心しながらも、親への“考”に心が大きく振れたこと。一つ目には、放蕩行為のみならず、それに関わる「金の切れ目が縁の切れ目」の友人知人の行動も付属する。

さて、道徳的な価値でとらえると、前者の放蕩行為への反省は「節度ある生活態度」と結びつき、さらに何度も繰り返すあたりは中学年の「正直明朗」あたりも関わってきそうである。そして、友人たちに焦点を当てれば自ずと「信頼・友情」も関わってくるであろう。後者は「家族愛」にほかならない。

人間・杜子春

仙道を志すにはひたすらにストイックでなければならぬ。スポーツ選手や、歌舞伎・能・狂言といった芸事の超一流のみが神仙の域に近づける瞬間はあるのかもしれないが。

かなり前の選手だが、野球界に榎本喜八（毎日オリオンズ等）という選手がいた。彼はあるとき「球筋ばかりか、ボールの縫い目や芯までがはっきりとわかるようだった」「自分の身体がどんなふうに動いているか、寸分の狂いもなく、実によくわかった」という感覚を覚え、それを「神の域へ行かせていただきました」と表現した。しかし、彼もその域に達するためには世間から奇人とまで揶揄されることもあったという。

話を戻す。本来的な仙道の世界は孝だの義だの



田端の旧宅付近。
当時の田端は多くの
文士画人が集まる
地であった。

といった徳はまず二の次なのであろう。外見的な肉体的苦痛も、内面的な世俗の徳・価値も超越せねば「仙人」たりえないということである。

だが、芥川は杜子春を、世俗を離れた特別な人物（＝仙人）とはさせず、あくまで人間「杜子春」として描き出した。仙人を目指すという大義を重視しつつ、それでも目の前の弱者、それも自分の“母”を顧みずにはいられない。これを人間の真に大事な部分としているのである。

「ではお前はこれから後、何になったら好いと思うな」と問われた杜子春は言う。「何になっても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」。責められる母を前にしても黙ったままなら、その命を絶つつもりだった仙人（鉄冠子）も、杜子春に「人間らしい」生き方を選択することを求めていた。杜子春へちょっとしたプレゼントを用意し作品は終わる。仙人になれないからと言って、杜子春はそれを恥ず必要はなく、むしろそれが真つなのだ。それが、『杜子春』という作品であろう。



芥川の眠る巢鴨・慈眼寺の墓地

〔引用・参考文献〕

『蜘蛛の糸・杜子春』（芥川龍之介/1968 新潮社）

『打撃の真髓 榎本喜八伝』（松井浩/2005 講談社）

4 コマ漫画で価値を構造的に分析



1. 自由に言っていんだよ

「道徳の時間は何を言ってもいい時間」言い換えると「自由に言ってもいい」ということ。これは本当だろうか。

道徳の時間に限らず、万人に表現の自由は認められているわけで、そう考えれば、はじめから教室の子どもたち全員に発言の自由は保証されているのである。

むしろ、「どんなことでもいいから言ってほしい」というような、発言を歓迎する教師側の思惑も絡んでいると言えよう。では、なぜ「道徳の時間は」なのであろうか。算数だって体育だってよいではないか。何の授業だろうと、子どもたちが活発に発言した方がいいに決まっている。

おそらく、道徳の時間には、他教科に比べて「それを言っちゃあおしまいよ」的な、きつい縛りが、暗黙のうちにかけられているのではないだろうか。その縛りがきつすぎると、表面を取り繕った言質だけが行き交い、白々しい世界が創出される。それを防ぐために、「ぎりぎりの本音」をなんとか引き出し、授業を活性化させようとする教師側の苦悩が見て取れるようである。

はじめの問いに戻りたい。何でも自由に言っていけないわけがない。何でもありは何にもなしと同じことであるから。一本筋が通っていない授業はしまりがなく、教師にも子どもにも結局徒労感しか残らない。しかし、それは道徳だからではない。どの授業でも同じことである。

自由（な発言）が前向きに機能するのは、本質に向かう目標設定の共有という、全員にとって共通の縛りがかけられている場合である。その縛りのキーワードは「道徳的に」では決してない。あくまでも「学ぶ者」として、つまり「人間として」である。

道徳授業の工夫

筑波大学附属小学校教諭 加藤 宣行



2. 自己責任

「自由時間」これほど子どもたちを高揚させる響きを持つ言葉も少ない。この漫画を使って、「自由には責任がつきものですよ」などとお説教めいたことを言いたくはない。

「自由気まま、好き勝手にすると、怪我をしますよ」というのも少し違う。

自由とは何だろう、自分たちに与えられている自由を使いこなすために必要なことは何だろう。堅く言えばそういうことだろうか。

和英辞典で「自由」を引くと、『Freedom』『Liberty』の2文字を見つけることができる。次に英和辞典にあたってみる。両方とも「自由、解放、勝手気まま」という意味がある。加えて前者は「独立、無遠慮、解放されていること、免除」、後者は「随意、権利、特権」と続く。

『Freedom』は一人孤高とした感じ、『Liberty』は皆で手を取り合って選んでゆくという感じを受けた。両方とも自由の概念として重要な意味を持つであろうが、その中でも私は「随意」という言葉にピンときた。国語辞典で「随意」を引くと、「自分の思うまま、勝手」とある。「自由」を言い換えたに過ぎないが、『自分の』というところが重要である。思うままに行動する主体である自分がどのように思うのか、どのように思うことができる自分を育てるのが問われるわけである。

その意味で、自由は自分を試される。「自己責任」のもと、自由自在にスキーを楽しむことができるか、無茶が原因で怪我をして「事故責任」とらされるか。まさに自分次第である。自在にスキーを楽しむためには、ゲレンデのルールを守り、スキー技術を向上させる努力をし、お互いの滑る権利を尊重しなくてはならない。それができる人間が、自由を得る権利を得る。

自由とは甘くて厳しい罫なのである。